

倫敦の狐 Fox in London



課題

「次の YouTube の画像の分析を通して、(i) キツネの「気分」の観点からと、(ii) 撮影者の「気分」を想像して、人間がおこなう動物の「擬人化的解釈」について考察してみよう」

©London Fox Visiting (2分32秒)

<http://www.youtube.com/watch?v=QYRqQojcE-Q>

(註釈の多い、初稿の課題の文章)

現在、倫敦(1)市内(都市部)には1万から1万2千匹のキツネがいるらしい(2)。次の YouTube の画像(3)の分析を通して、主に、(i) キツネの「気分」の観点——ワイトゲンシュタインなら「君はキツネではないので、キツネの気分などわからないだろう」(4)と論されるかもしれない——からと、(ii) 画像の末尾で何かしらの「言葉」をつぶやく撮影者の「気分」——再びワイトゲンシュタインなら「君はこの撮影者ではないので、この撮影者の気分などわからないだろう」(5)と再度論すだろう [か]——を想像して、人間がおこなう動物の「擬人化的解釈」(6)について考察してみよう。

この課題の出題者：垂水源之介(キリスト [ガリラヤのイエシュウ] を愛する(7)男

註釈

(1) ロンドン (London) と書くべきところを「倫敦」としたのは、漢字のほうが恰好良いと思ったことと(その作品をまともに読んだことのない) 夏目漱石「倫敦塔」に敬意——なんで?——を表してのことだった。ちなみに「倫敦塔」には動物に関する比喩が冒頭に登場するが、これは(御殿場について知らないにも関わらず、その「語感」とファニア・パスカル風に闇雲に憧れるのだが) 私の好きなものである：「まるで御殿場の兎が急に日本橋の真中へ抛り出されたような心持ち」。

(2) この情報を知ったのは2012年5月31日の朝の某公共放送のニュースだった。他の外国の報道番組やインターネットなどでネタを仕入れ、適当に独自インタビューを入れた「いい加減」なプチ・エンタメ企画だった(と思う)。しかし、キタキツネと「共生」していたかのような生活経験のあった元札幌市民の私としては、倫敦の市民が経験していることは、なにか他人事のように思えなかった——だからと言って北摂住民としてのイタチやタヌキとの共存が意識化することはなかった——し、おまけに私の最近の研究テーマのひとつに昨今の「人間と動物」の関係についての文化人類学的研究というものがあり、出勤前の一時にちょっとネットで情報検索して(=ググって)みたのだった。ちなみに、北海道でのキタキツネと人間様の共存の話題で困ったことが、寄生虫エキノкокクス (Echinococcus, 条虫) の種間での感染症の問題だったのだ。——以上、西村先生の「現場力と実践知」の課題風の解説。

(3) 最初、私は、YouTube ではなく Google の画像検索をおこない、その検索語を“fox in london”と入力した

ところ、狐の他に妙齢の女性の写真が出てきたのである！3秒ほどで、その理由が氷解したが、それはどうも倫敦のナイトクラブに由来するものらしい。キツネにはずる賢いという意味（＝文化表象）のほかに、牝狐に表現されるように妖艶だが信用できない、という意味もあることはお分かりのはずだ——だからといって Firefox はそれほど「悪い」ブラウザーのようにも思えないが？！詳しくは Edmand Leach の論文(1964) “Anthropological aspects of language,” を参照。脱線ついでに漱石「倫敦塔」の終わりあたりには「倫敦にやだいぶ別嬪がいますよ、少し気をつけないと険呑ですぜ」という台詞がある。

(4) ファニア・パスカルへのお見舞いでは彼は「車に引かれた犬の気持ちなどわからないくせに」と発話したので、「君はキツネではないので」という理由を述べた条件節は、私の創作である。だから私のワイトゲンシュタインは、その哲学の部分を含めて創作＝でっち上げである。

(5) 「キツネ」の代わりに「撮影者という人間」を入れ替えたところに、我々は違和感を感じなくなるのはなぜであろうか？ 私の解答は、ワイトゲンシュタイン的批判力が、こと他人になれば、犬（あるいはキツネ）よりも鈍るからである。この落差は、ファインダーを覗いて写真を撮る塩銀写真のかつてのカメラマンとモニターを見ながら写メをとる現代人の「視座と認知の違い」を指摘した宮本友介氏の指摘（確か2012年5月22日）を思い出す。俺達は、轢かれた犬の経験など知らないのに、平気で轢かれた犬になってしまう——その「なりきりの気分」はそこそこ人間生活を豊かにする原因にもなっているのだが。

(6) これが、この授業の課題のメインピックです。つまり、YouTube の映像をみて、キツネのしぐさ（とカメラの動きも含めた人間の側の反応）を「擬人主義的に解説すること」これです！

(7) これも授業で披瀝しましたが、ファニア・パスカルが覚えているワイトゲンシュタインの言葉「君はイエスを愛することはできないよ。なぜならイエスを知らないんだから」。鋭いけれど、唐突な話をする点ではイエス・キリストも同じです——もうこの表現じたいが誤謬の固まりですけど。だから——何で？——ギリシャ語福音書から山浦玄嗣訳でルカ6：27-36 をプレゼントします。これは道徳あるいは哲学上の観点からではなく、日本語の「語感」という観点からの考察するための資料としてです。

文献

- Leach, Edmund Ronald. - 1964. - "Anthropological aspects of language : animal categories and verbal abuse", in: New directions in the study of language / Eric H. Lenneberg, ed. - [9th print.] - Cambridge Mass. : MIT press, 1975. - P. 23-63

かたきであってもだいにしろ！（ルカ 6:27-36）山浦玄嗣訳（8）

「俺の言葉に耳を傾けているお前さんたちに言う。敵（かたき）であってもどこまでも大事にし続けろ。お前さんたちを嫌っている者たちにも親切を尽くし続けろ。公お前さんたちに災いを祈っている連中によいことがありますようにと願ひ続けろ。お前さんたちをいじめている者たちのために何をやってやったらよいか教えてくださいませと願ひ続けろ。お前さんの頬（ほほ）を叩く者には、もう片方の頬を差し出し続けろ。お前さんの上着を奪おうとする〔追い剥ぎのような〕やつには、下着も断るな。誰でもあれ、くれという人にはくれ続けろ。お前さんの持ち物を奪う者に、返せ、返せと言っているのをやめろ。

誰かが自分にこうしてくれたらなあと思うことをその通りに人にもしてやり続けろ。

自分を大事にしてくれる人を大事にしているからといって、何か誉められるようなことをしていても思っているのかね、お前さんたちは？ ろくでなしの罰当り者どもであっても、自分を大事にしてくれている人を大事にしているものだけ。

自分によくしてくれている人によくしたからといって、何か誉められるに値することをしているとも思っているのかね、お前さんたちは？ ろくでなしの罰当り者どもだって、そのくらいのことはしているぜ。

返してもらおう当てのある人に貸したところで、何か誉められるに値することをしたとも思っているのかね、お前さんたちは？ ろくでなしの罰当り者どもだって、返してもらおう当てがあればこそ、ろくでなし仲間に貸すのだよ。

そうではなくて、敵（かたき）であってもどこまでも大事にし続けろ。人には親切を尽くし続けろ。返してもらおうことなど何もあてにせずに、貸し続けろ。そうすれば、お前さんたちは必ずや大いに救われる。そうしてこそ、お前さんたちは神さまにとっての愛（いと）し子だ。神さまは、恩知らずな者どもにも悪者どもも情け深いお方でありなさる。

お父さまが太っ腹でお情け深くありなさるように、お前さんたちもまた太っ腹で情け深くあり続けろ。」

マタイ 5:38-48, 7:12 参照

註釈（8）この箇所は、同日のその後の「セーフティネット論」で読み上げられました。期せずして、社会保障をめぐるベーシックインカムをめぐる議論で、受講生のあいだで激論が交わされました。そのなかでTAのY君が最後にまとめた言葉が印象的でした。それは、このルカの福音書の「かたきであってもだいにしろ！」の、真逆の例、すなわちベーシックインカム制度を是認し、それを〈倫理的に逡巡することなしに〉受け取るためには、国民全体が、イエスが言うところの「罰当たりで恩知らずな悪者」になるべきである、という結論が導かれることです。つまり、ベーシックインカム論に、我々がどこか（プチブル的な）違和感を覚えるのは、自分たちが「罰当たりで恩知らずな悪者」になりたくないという気持ちと、国家というものに「太っ腹なお父さま」（文字通りパターンリズムの権化ですね！）という〈おいしい役割〉を与えたくない——国家はやはり市民によって管理されるべきという民主主義的な考え方の基本——人民の欲望なのではないかと……